

理学部一年生男子と理学博士の母



野村 淳子

東京工業大学資源化学研究所
[226-8503] 横浜市緑区長津田町 4259
准教授, 理学博士.
専門は触媒化学, 赤外分光, 無機材料合成.
jomura@res.titech.ac.jp
www.res.titech.ac.jp/~shokubai/top.html

早いもので、息子もこの4月から大学生になってしまった。筆者の世代では、大学院修士課程であっても女子学生は少なく、これまでに携わってきた関連学会（触媒学会、石油学会、ゼオライト学会など）では、女性の正会員はさらに少ない。そのためか、筆者の私生活にイベントがあると、経験や感想などを手記という形で、皆様に披露する機会が与えられてきた。たとえば、結婚したあと（石油学会誌）。あるいは、出産したあと（触媒誌）。そして、子育て中の出来事の数々を、ロールモデルの一例（むしろ笑話）として、講演会などで紹介してきた。無愛想な中学時代、少しだけ大人になった高校時代を経て子供も大学生になってしまうと、もうあまり「おもしろネタ」がない。さらに、親としての自覚も「もうどうでも良いや」なんて思っているのだから、参考になる話もない。困りながらもいろいろと観察してみると、私たちの会話は、普通の、よくドラマなどで観る母・息子のそれとは全く違うことに気がついた。もともと私はあまり干渉せず、最低の常識を守っている限り、感情的になって怒ることはない母親ではあるが。

大学生生活は、高校時代の生活とは一転して自由であり、また厳しくもある。とくに、理学部物理系学科に進学してしまった彼は、ファッションと生活の自由を謳歌しながらも、勉強に苦しんでいる。さらに、バイトをしないと何もできない。本人は大変らしいが、端から見れば、非常に充実した大学生生活を送っている。初めて実験レポートを書き上げたとき、誇らしげに私に見せた。「見ると赤入れたくなるから、見ないよ。」と返したら、「ざっと見てコメントをください。」とのリクエスト。私のコメント「これだけ数値群があって、プロットしないの?」、「横軸がランナンバーで、単位も意味もないから」、「まあ、でも棒グラフくらい付けておけば、バラツキがわかるよ」、「バラツキは誤差として数値で出すから」、「ふーん」と、こんな具合であった。レポートを印刷してみると、紙のはじが少し汚れ

ており、息子は嘆きながら再プリントしようとした。私は「内容に関係ないし、紙の無駄だからそのまま出せば」と伝えたら、それで減点する先生もいるとのこと。「じゃあ、ファイルで提出すれば?」、「そうだよな。言ってやってくれよ!」。近くで夫が苦笑していた。

再び先日「野村先生、この実験科目はどうしてもSが欲しいので、ばっちり修正願います!」と、また実験レポートを持って、深々と頭を下げて来た。私は、自分の学生の学会予稿集を直すのと同じくらいの気合いを入れて、細部にわたって修正し、その理由もきちんと説明して差し上げた。「これだけ直されると、圧巻だな。よくこんな細かいフォントの違いとか、気づくもんだ」、「それがプロのお仕事です」、「俺、超感謝してる、あざーっす」。夫が「相当高くつく仕事だということを、覚えておきなさい」と、フォローしてくれた。

逆バージョンもある。私が少し複雑な反応速度式を解いている際、積分式が若干複雑で、答えに自信がもてなかった。ついつい、導入式と解答を写メして、息子にLINEで「これ、あってる?」と確認を求めた。「元の問題はわからないけど、ただの積分解くだけだったら、あってる」と、多分授業中なのに、速攻で返信が来た。物理専攻はさすがに早いと感心したとともに、これは使えと、心の中で小さくガッツした。

あんなに小さかったのに、いつの間にか立派になって、など、確かに感じることは多いが、過去を振り返って感動するよりも、私たちは今、あまりにも共通点が多く、お互いにうまく利用し合い、それを楽しんでいる。こういう母・息子はあまりいないのではないか。今回の執筆にあたり、改めて気がついたことである。私たちが電磁場や波動の話をしていると、夫も高分子化学専門で博士（工学）をもっているのだが「俺には物理はわからない」と、少し離れてこちらを観察している。それもまた、楽しそうに見える。